編集後記

今月号の表紙は「京の秋の庭園」（伊藤敏明先生）と題した写真です。金閣寺近くの景色とのことですが、写真の中に「秋」を閉じ込めて持ち帰って来たような作品です。いつの日か同じアングルから同じ景色を見てみたいですね。

私の所属する浦添市医師会では、ここ数年間「3キロ減量運動」が行われています。耳にタコ、目にイカ？状態で、減量は関係者全員の無言の圧力によって強制に近い努力目標となりつつあります。そこで、今年の夏は食事を考え、ウォーキングや筋トレを積極的に（ほんのちょっと）取り入れることで、3キロどころか5キロ以上の減量に成功しました。10月にはメタボリックは解消されたと確信し、メジャーを持ち出して腹回りに挑みました。86センチ、惜しいぃ…！！それでも、念願の90センチ切りは達成です。

頑張って　痩せてもやっぱり　メタボ腹
メタボ腹　3キロぐらいじゃ　変わらない

福島産婦人科訴訟の一審判決が出ました。無罪です。控訴も見送られました。通常診察の範囲内で不可効力的に発生した急変事態が不幸な結果を伴った場合、これらすべてで刑事責任つまり犯罪者であることを疑われるのであれば、医療行為に内在する不確定要素から急変事態の発生が多く予想される診療科は、罪を犯す危険を前提として診療することになります。これでは医療行為そのものが成り立ちません。今後は、医療安全調査委員会の設置や、無過失補償制度の運用が注目されるところです。

報告コーナーでは、「九州厚生局の組織再編について」「九州医師会連合会平成20年度第1回各種協議会」などの報告があります。難しい内容ですが、それぞれに大切な情報を含んでおり、じっくりと読まれる事をお勧めします。

女性医師の割合は将来50％に達することが予想され、医師の労働力不足を解消する上で就労環境の整備が大切な課題になっています。「平成20年度女性医師の勤務環境整備に関する病院長等との懇談会」の報告では、環境整備に関する意見が取り上げられており、今後その実現に向けて取り組まなければなりません。

特定健診・特定保険指導Q&Aは、7月号より連載しておりQ&A方式で大切な情報を解説しています。必ず読みましょう。

生涯教育コーナーでは「急性胆管炎診断・治療」を、平成17年に作成されたガイドラインに沿って嘉数雅也先生が解説されています。重症急性胆管炎は、死亡することもある重篤な病態であり、早期に適切な対応を必要とします。

プライマリ・ケアコーナーでは、萩原啓介先生に「ヘルペス」を詳しく解説していただきました。日常診療に役立てて下さい。

インタビュー・コーナーでは、中部地区医師会長の安里哲好先生に、新医師会長就任の感想と、これからの抱負についてインタビューをいたしました。

月間（週間）行事お知らせコーナーでは、「乳幼児突然死症候群対策強化月間について（小濱守安先生）」「医療安全推進週間にちなんで（島袋洋先生）」「性の健康週間に寄せて（銘苅桂子先生）」「臓器移植普及推進月間にちなんで（宮里朝矩先生）」と題して執筆していただきました。このコーナーでは、毎回のように医療の幅の広さと内容の深さに驚かされ、自身の乏しい知識を補うために、いつも時間をかけて読むことになってしまいます。

若手コーナーでは、指導医と研修医それぞれの視点から2題の寄稿がありました。「研修医の皆さん、頑張れ！！（崎原みち代先生）」のなかで、ご自分の研修中に指導医から（研修医は患者さんのベッドサイドに行け）言われたそうです。懐かしい言葉です。私もそのように教わりました。そして、同じように指導したことを覚えています。「研修医として指導医に求めること（高松岳矢先生）」では、やりがいを語ってくれる指導医を求めています。心配はいりません。各科の若手指導医のほとんどは、自分の選択した診療科について熱く語ります。医療はどの診療科であっても、数年で興味を失うほど浅くはありません。きっと、どの分野でも面白い話を聞くことができると思います。

「“波の上”我がふるさと（下地武義先生）」「沖縄の露地に咲いた無憂華一輪（長嶺信夫先生）」「ぐーたらダイエット記（新垣義清先生）」「北の大地（堀川恭偉先生）」の4題の随筆が寄せられています。それぞれの先生方の懐かしい思い出、日常生活での楽しい出来事、趣味への思い入れなど、読みながら一緒に体験しているようで面白くなってしまいます。

やっと読み終わりました。こんなに盛りだくさんだと、毎回全部は読めませんね。嬉しい悲鳴です。寄稿・投稿など、ご協力をいただきました先生方に感謝いたします。

広報委員　池村 剛